

湖畔寸講

第二講「気について」

◆ 気という文字の意味

ダーマというものがどういうものであるかは先の講で簡単に触れました。そんな触れかたでは申し訳ないんだが、まあ、簡単に概略的に、一口で言えばということですね。

さあ、それで山川草木、岩石、あらゆるものがもう何もかも一切合財がですね、雪でも雲でも雷光でも雨でも大風でも、それらはみんな疑いのさしはさむ余地のないダーマの不死力です。これは絶対にあります。雷光を見てみなさい。ピカピカやるじゃない。ゴロゴロやるじゃない。あれは大変なエネルギーですね。

ハイ、そういう具合にダーマと称せられるものは、本当に掴みどころがないが絶対にあります。「疑いをさしはさむ余地なきダーマの不死力こそが信の因」。疑おうとしたって疑うことのできない力がみなぎっておる。中国人はこれを〈気〉と言いました。

気というのは、文字で書きますと、「氣」こう書きますね。上の気というの、気流がずーっと流れていくマークですね。しかもそれは、宇宙全体に広がるぞということを表わしております。中の十は、一切を示します。その十字の開いた四つの空間に得体の知れないマーク(、)がありますね。これは本来「米」という文字ではないのです。これは宇宙にみなぎったもの、みなぎる力というものを表わしております。

だから今のように「気」という文字の中を「メ」と書いてしまうと何のことだか意味がないのです。このことは、今、中国の学者が非常に後悔しております。何もかも簡略化してしまって文字の持つ本来の意味が判からなくなってしまいました。最近、中国へ行った漢学者や儒学者が報告しておりますね。「中国はつまらんことをした。難しいからと言ってあの古来から続いていた文字を簡略にしまって何のこ

とか意味が判からなくなってしまった。」と嘆いているそうです。

文字の意味からいくと確かに簡略にするとそうでしょうが、ところが、中国人の日常生活を考えてみますと、あの難解で画数の多い文字を使用するということは大変なことなんですね。手紙一枚書くのに何時間も費やすといえますからね。

ところで、もともと気という自は、「氣」と書きましたね。実は、この字の上の方の「氣」は気の流れを表していると申し上げました。では、その下の「米」というのはどういう意味を表わしているのかと申しますと、縦軸と横軸の交わり。この縦軸というのは〈時間〉を表わします。横軸というのは〈空間〉を示しております。空間的にも時間的にも一杯ということです。

何が一杯かと言いますと、これは、得体の知れないもの、測り知れない力が満ち満ちている。流れている浮いているということを表わしております。

天気・電気・水蒸気・雰囲気、これらはつかみどころがないものですね。しかし、たしかにそういうものはあります。

ハイ。ここには、この研修会の雰囲気があります。今、ここに見ず知らずの人がポッと入ってきたら「これは何だろう。ホーッいかめしいなあ」という感じがします。気がみなぎっておる。皆が道を求めていく真剣な顔つきが満ち満ちておる。そりゃそうでしょう。例えば、ケチな商売人の店に入った時から何か冷たい感じがします。反対にいつも和気あいあいとして、どんな貧乏人がやって来ても大事なお客さんと同じように大事に扱ってもらえる。そういう店には、人を包み込んでしまうようなあたたかな「気」がみなぎっておりますね。大事ですよ、これは。

そこで、中国人は〈気〉こそ〈ダーマ〉だ、こう言ったんです。インドにおけるあのダーマに似たものを早くから発見して、これを〈気〉

と言いました。

ところが、気とダーマとは少し違うんです。ほとんどよく似ているけれども、また違うんですね。ダーマの方には靈氣がありますね。この魂、靈の気が。〈魂氣〉と言っていいが、魂氣は「根氣が強い」とかいうように使われておりますね。この根氣と魂氣とを間違えるので「靈氣」というように呼びました。

靈氣というものも、これは意味がわかりませんがたしかにあります。これにちなんで、これから私が具体的に中国で経験した非常に印象的な出来事をお話してみたいと思います。この事件は日本では絶対に経験できないものですから私にとって強烈な印象となって残っております。

◆母の愛に見る気のはたらき

ある家の五歳になる女の子が誘拐されました。誘拐されて連れていかれた先はどこかわかりません。それでと手も両親が心配してあちらこちら手を尽くして探しましたが見つかりません。それを見かねて近所の人たちや職場の人たちも大騒ぎをして捜してくれたんですが皆目見当がつきませんでした。

そんな苦しい日何日か過ぎたある日、母親は夢を見ました。母親というものは強い靈氣を持っておるもんですね。そりゃもう真剣にあれやこれやいろいろ思い悩んでいたその若い三十二歳の母親が夢を見たんですね。母親の子を思う一念が通じたのでしょうか。その夢の中に出てきた五歳になる女の子が自分の居る場所とあるところへ行く時間を母親に告げたそうです。

その場所というのは新京駅(今の長春)で「四日の朝の五時に新京駅へ迎えに来て」こう言って母親の夢の中に山てきだそうです。

四日という日繰り返して言い、新京駅という場所を告げ、五時という時間も言いました。五歳ぐらいの幼稚園の子どもがね、そんなにはっきりと時間と場所をピシャリと言えるものじゃないよね。ところが母親にたしかにそう告げま

した。

それからその母親は幾晩も眠られなくなりました。「あの子は今頃どうしているのだろうか」と心配で心配で、もういてもたってもいられなくなって、ついに意を決して警察へ相談に行きました。

「お笑いになるでしょうが、先日こういうことを夢の中で見ました。うちの娘が夢の中へ出てきてこう訴えたんです。日と時間と場所をはっきり母親である私に告げたんす。何とか捜査してうちの娘を無事に取り戻してくださいませんか。」そう切々と警察に訴えました。

警察としても半信半疑ですよ。そう言われてみたってその夢が本当かどうか疑わしいし、かといって母親の気持ちを思うとこりゃ放っとくわけにはいかないし、それじゃということで、それとはなしに見張っておいて上げましょうということになりました。

そして、その四日がやって来ました。ちょうど誘拐されて六日が経過しておりました。母親は主人に向かって「これから新京駅へ行って来ます。急行列車で行けば絶対に間に合うから私はこれから行きます」と言うと、主人は「お前が心配するから夢に出てきたのだろう。どうしても行きたければ行ってもいいよ。行ってきなさい。お前でなけりゃ駄目だろう。しこう言って主人は母親を励まして送り出しました。

その母親は新京の駅に夜中の二時に着きました。もう五時が待ち遠しくてしかたがない。夜中の二時・三時でしょ。誰もいない閑散として広々した大きな駅の待合所にひとりポツンとたたずんでおりました。新京の駅は東京の上野駅より人きく立派な駅でした。そこでジッとしておれなくて、あちらこちらをウロウロしていたら、手配をしておいてくれた警察官が四～五人制服の上から大きなジャンパーのようなものを着込んで、それと判らないようにカムフラージュして見張っていてくれました。そうして「お母さん、あんたは危害を受けると大変だからど

っかの柱の影からこっそり見ていなさ。何か変わったことがあったらすぐに知らせるから。その時の合図はこれだよ」と書いて「黄色のハンカチをポケットから出して振って見せるから、これが見えたら飛んで来なさい」こう言って他の警察官に「お前たちは分かれて見張っておれ」と言ってそれぞれ柱の影に隠れて見張っておりました。やがて午前四時半、五時になりました。ところが時間になったのにそれらしき犯入は現われません。母親は落胆しました。「やっぱり、あれは夢だったのか」こう思いながらそれでも一人も見逃すまいと目をこらして見ておりました。もう一生懸命です。そこが母親だよ。

そうしておったら、五時半ちょっと過ぎ頃に、ねんねこ伴天に子どもらしきものを背負った女が前を通りかかりました。ねんねこの襟を立てて子どもの顔が見えないようにして帽子をかぶせてありました。ところがどうしたとか、ねんねこの裾がまくれて二本の足が出ておりました。よ〜く見れば間違いなしに娘に履かせていた靴下でした。母親は飛んで行きました。そして我が娘の顔を確認するためにねんねこの襟を引っ張りました。ところがその女は顔を見せまいとして抵抗して一騒ぎしておりますと、警察官が駆けつけてその女を「ちょっとそこまで来い」と言って連行しようとしたんですがその女は大暴れ抵抗するんですね。その女は朝鮮の人でした。

やがてその女は抵抗を止めて警官に捕り押えられ警察署まで連れて行かれました。それから「お母さん、こちらへ来てあんたの娘さんかどうか確認してください」と言われて覗いて見たらその子はもう死んでおり、顔は紫色になっておりました。間違いないその子は我が娘でした。洋服、靴下、帽子みんな誘拐当時に着せていたものばかりでした。「間違いない我が娘です。早く家へ連れて帰ってやりたい」そう言いますと、「ちょっと待ってください。たしかにあなたの娘さんですね。間違いありませんね。お

母さん驚いてはいけませんよ。気持ちを取り乱してはいけませんよ」そう元気づけて「そこへ降ろせ」と警官が命じて子供を降ろしました。ところがどうでしょう。驚くべきことにその娘のノドからヘソの下まで真っ二つに切り裂かれておりました。内臓のあらゆるものは取り去っており、中は空洞になっておりました。その空洞に、長さ四センチのガラスのチューブの中に詰め込んだ麻薬が六百数十本入っておりました。

警察官が推定するところによると、死後一週間は経過しているだろうということでした。子供を殺してその腹の中にチューブを突っ込んでその上から締め上げて、いかにも本当の人間ですという格好をさせて、ねんねこに背負って、そして新京駅に来るまで四昼夜半かかっております。だから半腐りになっているのは当然ですね。

ところがどうです。夢に出てきたのはその前の朝ですよ。次の朝にはもう列車に乗っておりましたからね。どう計算してみても殺されてから夢枕に立っているんです。生きている間に夢に出てきたんじゃない。

その事件は忘れもしません。昭和十六年六月二十日でした。その当時、満州におられた方はこの事件を知ってびっくりしました。その母親の子供を想う一念の尊さと、あまりにもピッタリ当たった霊力のすごさに驚きました。まさに、子供の霊力がたとえ殺されたとはいえ、麻薬運搬の道具にされてしまったとはいえ、そういう形で子と母親との魂の交信をしているということの証明ですね。この事件は当時の新聞に大々的に取り上げられました。特に異民族との問題ですからね。その年（昭和二十年）の中ごろには戦争が終わりました。そんな混乱した時代でしたから、もう誰が聞いても「嘘だよ。作り話に違いない。」と言っておりました。ところが現在三重県の方がその当時の新聞記事を持っておられるそうです。『満州日々新聞』というのに大々的に掲載されました。

子供が殺された牡丹江と、逮捕された新京の街は随分距離的には離れております。急行で十九時間もかかるような遠い遠い街ですし、また、時間的には大変な差がありますよね。その子が死んだことには間違いありません。それを遠くに離れた母親の夢枕に立って、日と時間と場所を指定したということを皆さん信じられますか。そんな現象を信じることができますか。

◆ 合理を超えたダーマの力

母親の偉大なそれでいてすさまじい母性愛、さらには人間の能力のすさまじさとでも言うのでしょうか。その霊力のすごさ、これはもう人間の能力を超越したものです。そういうものがあるのです。私はこれは「ダーマ」の力だと思います。ダーマというのは、ただ合理的に説明したり判断する力だけではありません。そういう驚くべき力、合理を超えた力が働いているのです。「理を超えた力があるのだよ」ということ説明し下さった心理学の先生がおられました。面白かったですよその講義は。理を超える力がある。道理を超越した力がこの世にはあるんだよということをいろんな事例を引用されて説明してくださいました。

考えてみてください。そんな小さな子供がねえ、殺された後に夢にまで現われてきて、日と時間と場所をはっきり産みの母親に言うなんてのは考えられますか。ある人は笑うでしょう。ところが、人間の心の中には絶対に笑えないがそういうものがあるのです。人間と動物の間にもあります。愛馬を非常に可愛がる人は、その愛馬と飼主との間に理屈抜きにして不思議な心の交流が起こったということはよく聞きますし、犬だって猫だって同じように心が綱がっているなと思うような経験は皆さん一度ぐらいはあるでしょう。まして靈魂を持った人間同志です。この事件が本当に起こり得る事実だということがよく分かっていただけたと思います。そういう人間心理の中で特に理屈を超えた事実を「超理の

心理学」と言って面白い例を上げて講義していただきました。

ハイ、ちょっと脱線いたしました。今話を考えてごらん。そういった不思議なことが世の中には随分たくさんあるよね。先程、「ダーマ」と「気」というものは少し違うよと申しました。

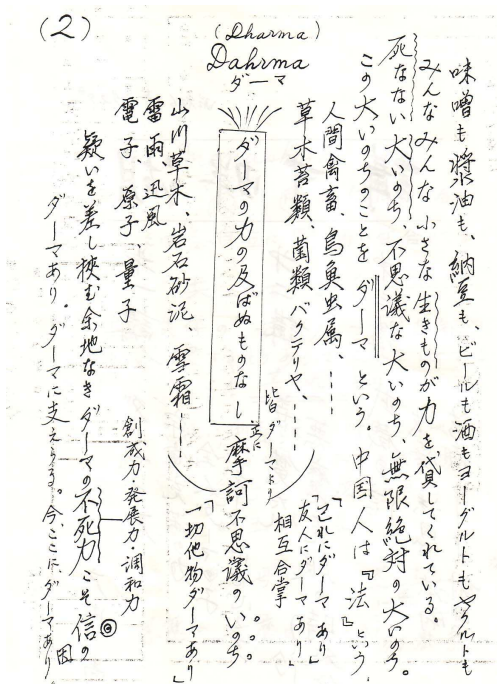
◆ 気の現わすもの

気というのは、理科で使うもので一杯ありますね。電気・磁気もそうですね。人間の心で言えば元気。「元気を出せよ」と言われると元気が出ますよね。また、「本気でやれ、本気で!」と言われれば本気になれますよね。あるいは「お前はねえ、何だそれは気違い沙汰か、正気でやれよ。もっと正気で取り組み!」と言われると不思議なことにそんなものが出て来るんですね。

中国の学者は、「正気・本気・根気・元気」これが大事なんだよ、と言っております。これは面白いですね。偶然じゃない。人間誰でもそれが出るんだから。「お前、本気でやれ!そんなことは狂気の沙汰だぞお前のやっていることは」と言われたら正気が出てくる。「もっと本気でやれよ、しっかりやれよ、大丈夫だ、きっと成功するぞ」と言われると、本気や正気というものが出てきます。「もっと根気強く、人間は根気が大事だ、粘ってやるんだ、もう一息」と激励を受けると根気が出て来るよね。出て来るから不思議なんだ。それはどこから出て来る。人に言われて出てきたり、自分の何処からか出てきたり、わからないけど出て来るよね。野球の応援でもそうでしょう。一生懸命応援してやるとなんだか元気が出てくる。そうするとおそろかにできません。ここでも不思議なものがあります。

今、言ったように、ダーマの方には霊気があります。私はわずかな経験ですがそのような気がします。ハイ、今はダーマの話から気の話になりました。ところがね、「人間そんなら余程立派なものを頂いておるんだから、何も心配する

必要なし」こう書いてしまえばそれまでなんだが実はそうではない。



◆ 心ほど定めなきものはなし

足利時代、京都の禅寺の大和尚がこういうことを言っております。「心ほど口惜しきはなし」と。何が口惜しいと言たって、俺の心を俺がどうしようもないんだもの。次に「心ほど恐ろしきものはなし」。人間の心はねえ、そんなに仏様や神様から頂いたと言って得意になっておるがとんでもない。恐ろしいものだよ。ハイ、その次「心ほどしぶといものはなし」。もうあきらめたはずなのに、忘れたはずなのにしぶといなあ。しつこいなあ。さらに「心ほど自由にならぬものはなし」。わがままをいう心というものは、そんな素直なものじゃないよ。心というものは案外性根が悪いんだ。また「心ほど迷わすものはなし」。心があれだろうか、これだろうか、右せんか左せんか。前せんか後ろせんか。とにかく迷わされます。ハイ、「心ほど言うことを聞かぬものはなし」。心という奴は言うことを聞きませんねえ。俺はあっちがいいというのに、もう一つの心がこっちがいいという結論を出してしまいます。

「心ほど心迷わすものはなし」同じような心で

すね。心迷わすものが二つあるということですか。ハイ、そうして最後に「押さえも抱えもならぬものは、この心なり」。な～に、この心くらい押さえつけて言うことを聞かせてやろうと思ったってそうはいかないぞ、ということですね。これは先程言いましたように足利時代に京郁の禅寺の大和尚が自分で研究し、考え、体験し、人の話をまとめあげたものです。

◆ よく整えられし己れの心

それを、宗道臣先生は「よく整えし己れこそまこと得がたき寄るべなり」と釈尊の言葉でまとめられておられますね。これが大事なんです。よく整え、よく整理整頓をしなかったらとんでもないこういうマイナスばかり出てくるよ。だからよく整え、よく調御し、頼りにできる自分を自分で造ることの大切さがここに 있습니다。

「己れこそは己れの寄るべ、これに寄らなければ何に頼るのか」ということを言われているよね。その己れの心をちゃんとよく整えられてこそ、よく整えておればこそ、本当に寄るべとなるんだぞ。整えられていなかったら頼りにならない。マイナスばかりだ。

あなた方も経験があるでしょ。「しまったなあ。どうしてあの時、ああいうことをしたのか。俺の心も迷ったものだなあ」こういう苦い思いをしたことがあるでしょう。小さいにつけ大きいにつけ失敗はあるでしょ。「あの時、あれほど人から止められていたのに言うことを聞かなかったばかりに」ということが。

そういう時は、自分の心が整頓されていなかった。「よく整えられし我が心こそ」と開祖・宗道臣先生は言っておられる。

この「よく整える」ということでありますが、皆さん自分の机の引き出しの中を思ってください。キチンと整理されておりますか。整頓されていないと急いで探す時には見つかりませんね。よく整えてあればサッと右から左に出てきます。あれと同じです。道具をキチンと整えておけば、

いつでもすぐに使うことができます。整えられていなければ使う時に使うべきものが見つからない。使えない。我が心はどういう風にして、何を大事にして整えたらいいのだろうか。心を整えるということの重要性がここにあります。

我々はそこまでいかない。そうしなきゃ修養にならないんです。俺の心を俺が整えるということは何を目安にして整えたらいいのでしょうか。

箱がたくさんあるから、箱に凡帳面に収める。それは物を整頓するのに便利がいいよ。引き出しがたくさんあって、ラベルが貼ってある。これは整頓されています。ところが、心を整えるということは箱を用意するわけでもないが何だろうかと。その基準となるもの、それは心の軸だな。心の軸となるもので、ちゃんと縦横整頓することができる一つの目安として私は次の四つの箱を挙げてみたいと思います。

◆ 敬愛・信頼・従順・感謝

それは「敬愛・信頼・従順・感謝」という四つの箱です。これはスイスの大教育者ペスタロッツが言いました。これを繰り返し繰り返し言いました。

「人間を人間らしくするのはこれだ。子供を人間らしく育てあげるのはこれだ」そう言いましたね。

一番はじめの「敬愛」。これは単に愛だけじゃないよ。愛は危険だよ。ズルズルと引きずられるから。愛は愛だが、「敬」をしっかり持った、中心に敬を持った愛。これが「敬愛』です。

キリスト教では愛というものを大事.にしてあります。ところが、愛というのはね、ズルズルと引きずられるんだよ。「愛」という文字の下「久」は引きずるということを表わしています。これが足を引きずります。これが愛という字の意味なんです。心を引きずります。女々しく、恨みがましく、いつでも。

そうじゃない。「敬」があつたら、敬によっ

てリードされる愛だったら、これは本物の愛。本当に相手を敬愛し、相手の人格に魅かれるような、そういう愛情だったら本物。親子間、友人間、師弟間。あるいは人との間に敬愛があるかないかということは、心を整頓するのに大事な一つの要素になります。愛は敬によって愛になるんだ、ということですね。

二番目の「信頼」。信ということですね。これは第一講で申し上げた「ダーマ」というものは、これは絶対に宇宙の中にみなぎってあるんだね。これが元なんだね。ないことはないんだというのをそれを信じ切っておる。信じ切っておるからそのダーマの力に頼り生きることができる。こういうものを持つ人は強いねえ。信じるものを持つ人は強い。

ハイ、次は「従順」。これは人間らしいよね。女の人だけが従順というのじゃない。すべて力あるもの、尊ぶべきもの、敬すべきもの、これに対して素直・従順についていくということは、あなた方の稽古の形でもよくわかる。従順に素直な性格の人はグングン伸びていきます。

それと同時に、最後は「感謝」。これは説明しなくてもいいでしょう。感謝のない者は人間じゃない、本当に。

私も八十余年生きてきて、その間いろいろな経験をしておりますがね。大陸から引き揚げてきて長く福岡におりそして東東へ出てきたんですが、立場上いろんな人から就職の世話をいたしました。「先生、いい就職口があつたら頼みます」「こういう方面の就職口はないでしょうか」。もう頼む頼むばかりでよく来るんです。はじめはここまで頼まれるんだからということで真剣になって探しておりましたが、あまりに多いので、もう手が廻らなくなりました。ことわっても何度も何度もやって来たそういう連中が、成功した時にお礼の一つも寄こしません。電話一本でもいいんだ。葉書一枚でもいいんだ。

「先生、お世話になったがこういうことで、お陰さまで今こういう所に勤めております」これ

だけでいいんですね。これで私も大安心です。
ところがしつこい人に限って知らん顔だね。現
に勤めておって「あ、あんたあそこに勤めてお
ったのか」と後でこちらが知るようになる。こ
れは腹が立ちますなあ。感謝の心のないような
人間はやっぱり人間じゃない。昔から動物だっ
て三日も飼われたら恩を忘れないと言うよね。
そういう具合に感謝というものも、確かに人間
の心が整理されているか、整頓されていないか
を見定める大きな基準になりますね。

敬愛・信頼・従順・感謝。言葉で言っしま
えばこれだけだが、どれ一つできても通じます
よね。そういう意味で、ある子供には「敬愛」
を激しく教えたが、この子供には敬愛よりもむ
しろ「感謝」「従順」をし向けてやろう。

子供の性格によってこちらが何を与えるべ
きか選択しますよね。いずれにしても、これは
人間の心をよく整え、よく整理し、よく整頓す
るための一つの手がかり足がかりです。

だから繰り返します。感謝のない人間は駄目
だ。従順さのない、心を空にしてついて来る、
そういう風なものがない人間も成功しません。

信頼や敬愛のないような人間は相手の人か
らいつか捨てられます。相手にされなくなりま
す。どうぞ、美しいことばかり言うようですが、
何かこういうものによって自分の心を整えられ
たら、整頓し直したら、こんなマイナスの心が
出てこないんじゃないのだろうか。プラスの力
の方が強くて、プラスの力がちゃんと整頓して
くれる、そうじゃないかと私は思います。どう
でしょうか。

サギが相次いで出てきております。やれ土地
ころがしがどうだとか、巨万の富を得たとか、
わずかなことで大騒ぎしております。あるいは
気に入らないからといってあっさり人を殺して
しまう。おまけに殺して保険金までものにして
しまう。子供を誘拐する。もう目を覆うばかり
の犯罪・事件が多発しております。これらはみ
んなこういう四つのことが守れないどうしょう

もない人間の弱さなのでしょうが、だからこそ、
ここに「心を整える」ということの重要性を見
直さなければならいんだよ、ということが問
われております。そして、人間社会にこういう
ものがある限り「善魔」が必要になってくるの
です。

◆ 善魔であるべきこと

観音様や弥勒菩薩は穏やかな顔をされてお
ります。白人がよく質問します。「仏教というの
は一体何ですか」「あの仏像の夜叉や鬼みたい
なのは何ですか」「あんなものが信仰の対象に
なるのですか」そんなことを質問いたします。

どうですか今の日本は。随分悪どいことがは
びこっておりましょ。下手に金持ち国になっ
てくれない方がいいなあ。もうこのくらいでやめ
といた方がいい。これ以上金持ちになったら人
間の心を失くした人間ばかり増え犯罪が増える
ばかりです。

やはり、悪があるからこの世では悪を抑える
力があるよね。仁王さんが天の邪鬼を足でギュー
ーツと踏みつけて、天の邪鬼が「グワァーツ」
と参った顔をした仏像があちこちのお寺にあり
ますね。あれを見ると、ああいう世界が現実
にあるんだったらそれを止め、その悪を知らせ、
そして目を覚まさせるという導く姿があっても
いいよね。これが「善魔」であります。

少林寺拳法はそれを形として現わしており
ます。ちゃんと拝んで、お互い敬愛をして、信
頼し合って、教えに従順で、そして感謝の心を
整えて「ヤァーツ」と構え、その構えた姿は今
度はやれるもんならやってみろ、殴り掛かるな
ら殴ってこい、と言わんばかりにその構えをさ
れますね。その両方が整うということが、これ
が他の武道にない良さです。

私は遠くにいる、外野席にいる応援者ではあ
っても、少林寺拳法の舞台の上でヒットを打っ
たこともなければ、あるいは滑り込んだことも
ありません。何もできてはおりません。ただ外

野席から見てもこの少林寺拳法というのはよくも人生の裏表一体、強弱一体、あるいは左右・前後・上下一体、あらゆるものがちゃんと反対のものが見事に調和されているなあと感心します。これはまことに見事な武道です。こう思って拝見させていただいておりますが、どうぞ、今日のところは善魔の克服と、善魔であるべきこと、それが第二講という形に代えて簡単に過ごさせていただきました。

